

ダクパゲンツェンのガナチャクラ儀軌和訳研究

静 春樹

1 はじめに

本稿は、チベット仏教四大宗派の一つであるサキヤ派の内部で作られたガナチャクラ（以下、聚輪）儀軌の代表的な幾つかを選んで和訳し、それらの内容を考察する論考の一部である。

最初に初期サキヤ派の人物のつながりを簡単に説明する。ツァン (gTsang, 蔵) の豪族クン氏は前伝期の旧訳密教を奉じていたが、クンチョク・ゲルポ (dKon mchog rgyal po 1034~1102) の代になって、インドから帰国したドクミ訳経師 ('Brog mi Shākya ye shes, 992~1074) から新訳密教の伝授を受け、サキヤの地に氏寺を建立した (1073)。このクンチョク・ゲルポの息子が、サチェン・クングニンポ (Sa chen Kun dga' snying po 1092~1158, サキヤ寺座主 1111~1158)¹であり、サキヤ派の宗義は彼の手で確立されたと言われる。彼の没後に宗権は順に二人の息子、兄ソナム・ツェモ (bSod nams rtse mo 1142~1182, サキヤ寺座主 1158~1172)、弟タクパゲンツェン (Grags pa rgyal mtshan 1147~1216, サキヤ寺座主 1172~1216) へと推移する²。タクパゲンツェンの甥がサキヤパンディタ (Sa skya paṇḍita 1182-1251, サキヤ寺座主 1216-1251, 以下、サパン) であり、サチェンからは孫となる。さらにサパンの甥が第五祖パクパ ('Gro mgon Phags pa Blo gros rgyal mtshan 1234~1280, サキヤ寺座主 1251~1280) であり、彼は元王朝クビライの帝師となる。サチェンからタクパゲンツェンまでは「在家密教行者」であったことから「白衣三祖」、サパンとパクパは出家者であったことから「紅衣二祖」と呼ばれる³。

これらサキヤ派五祖の中で、聚輪儀軌の題名をもつ単独のテキストを著しているのは、第三祖タクパゲンツェン、第四祖サパン、第五祖パクパの三人である。筆者はサパンの『聚輪儀軌』和訳を既に発表している⁴。本稿では、先ずサパンが

¹ タクパゲンツェンによるサチェンの伝記は SKKB vol.3 No.5 Bla ma sa skya chen po'i rnam thar, Cha.167a6-175.

² [立川: 58~59]

³ [立川: 62] [田中 1993: 40]

⁴ [静 2010]

自らの『聚輪儀軌』を書き記す契機となったタクパゲンツェンの『聚輪儀軌の中〔篇〕』（以下、当該儀軌）の和訳を提示する。次に、当該儀軌とサパン作『聚輪儀軌』との簡単な比較を行う。続いて、タクパゲンツェン著 rGyud kyi mngon par rtogs pa rin po che'i ljon shing（以下、『現觀宝樹』）⁵の一部分を構成する「飲食の三昧耶」の科文を出し、実際に設営されて所作が為される集団的な行（*caryā*）であることを本質とする聚輪と思念上での觀想（*bhāvanā*）であることを本質とする現觀（*abhisamaya*）との対比を問題提起する。さらに、当該儀軌に対するサパン作『聚輪儀軌』の独自な点を明らかにする。最後に、当該儀軌が挙げる現觀の相承譜の問題に言及する。

2 サパンの『聚輪儀軌』作成の経緯および同書の科文

タクパゲンツェンの当該儀軌和訳を提示する前に、先ず、サパン作『聚輪儀軌』から、同書が作られた経緯を述べる本文末尾の文言および奥書を引用する。

以上で、無上瑜伽タントラと成就者たちの論書とグルたちの口訣に依拠してから、法王であり吉祥なる大サキャパ（タクパギェンツェン）の作法次第を釈し竟る。無垢なるタントラの中で説かれたとおりの意味を得成就者であるグルより相承して、大持金剛が人の姿を具えてサキャに住されたそのお方が纏めてお説きになった少し明瞭でないその善説を、要望する者たちに応えて、そのお方の御足の塵を恭しく頂いた Kun dga' [rgyal mtshan] という名をもつその者が明瞭にしました。（略）

無上瑜伽の聚輪の実践次第。幢幡の辺際までも莊嚴なさる法王（タクパギェンツェン）がお作りになった少し明瞭でないその著作を、要望する者たちに応えて、吉祥なるサキャパンディタが明瞭にされたものである⁶。

「不明瞭な箇所を明確にするために著す」という趣旨の表現は、一般的に先師の著作に基づきながらそれと同じ論題を著述する際の常套手段とも考えられる。しかし、ここでは敢えて文言どおりに受け取り、サパンにとって、タクパゲンツェンの当該儀軌のどの点が不明瞭に思われたのかを追求してみたい。そこで、当該儀軌を

⁵ SKKB vol.3 No.1 Cha.1-139a6., 70 葉からなるタクパゲンツェンの主著の一つである。サパンが師匠の指示でその校正を行ったことが同書の奥書（Cha.139a3-5）から知られる。

⁶ サキャ派全集 vol.5 No.5 Tshogs 'khor cho ga, [静 2010: 54]

理解する上での便宜を考慮して、サパン作『聚輪儀軌』本体部分の科文⁷を以下に挙げる。

0. 敬礼文と概義の開示	127a4
1. 聚輪の方規	127a6
1 時	127a6
2 場所	127b1
3 仲間 (grogs, 集会者)	127b3
4 資具	127b3
5 儀軌	127b3
1. 前行	127b4
(1) 会処を莊嚴する所作	127b5
(2) 資具の準備	128a2
(3) 金剛阿闍梨の入住	128b1
(4) 門衛阿闍梨への懇願と入住	128b2
(5) 本尊瑜伽の懇請	129a1
(6) 百字真言による心淨化	129a3
2. 正行	129a5
(1) 広大供養 (外供養)	129b1
(2) 甘露による智薩埵供養 (内供養)	130a5
(3) バリによる生類供養	130b3
(4) 飲食による瑜伽者供養	130b6
(5) 歌舞によるダーキニー供養	133a1
(6) 俱生智による身曼荼羅供養 (性瑜伽)	133a5
3. 随行	133b2
(1) 生類への残滓施与	133b3
(2) 智慧ダーキニーへの讃嘆	133b5
(3) 違犯した三昧耶の修復	134a5
(4) 誓願の奏上	134b2
(5) 曼荼羅の奉送	135a1
(6) バリ供養	135a3

⁷ SKKB vol.5 No.51 pp. 358~364., [静 2010]

6 目的	135a5
2. 論難者への論駁	135b3
3. 儀軌の区分（人・時・本尊瑜伽・目的・供養の対象）	138a5

3 テキストと和訳

凡例

- ①和訳は『サキヤ派全集』⁸vol. 3所収（pp. 228~230）のテキストに基づいている。
訳出に際しては、Sa skya bka' 'bum dpe bsdur ma las Grags pa rgyal mtshan gyi gsung 'bum, dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang nas bsgrigs, [Pe-cin] : Kung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2007（『サキヤ派全集・活字本』と略）⁹, Mes po'i shul bzhag 11（pp. 324~332）を参照した。
- ②テキストのローマナイズに当たり、人名は最初の基字を大文字にした。
- ③翻訳上で補った語句は亀甲括弧〔 〕で示し、訳語の理解を図るため丸括弧（ ）内に説明の語句あるいは想定されるサンスクリットを入れた。
- ④全体の構成を知るための便宜的に作成した科文を最初に挙げた。

科文

I 敬礼文と概義の開示	109a4
1 時	109b1
2 場所	109b3
3 資具	109b3
4 儀軌	110a2
1. 前行	110a2
2. 正行	110b3
(1) 外供養	110b3
(2) 内供養（甘露供養）	110b4
(3) バリ供養	111a4
(4) 聚会供養	111a6
(5) 歌舞供養	112a2

⁸ サキヤ派初期の五祖たちの著作を纏めた著作集。18世紀にデルゲ印経院が出版した全集のリプリント。

⁹ ペルツェク研究所編纂の『サキヤ派全集（活字本）』は、註8のデルゲ版を底本として、Zha-lu本と Lu-phu本の2つの写本を校合している。

(6) 真実供養（性瑜伽）	112a4
3. 随行	112a4
5 目的	112b6
II 願文	113a1
III 奥書	113a3

I 敬礼文と概義の開示

「聚輪の中〔儀軌〕」でございます。

オーム、成就があれかし。功德の宝石を生じさせる離戲論のグルの御足の蓮華に恭敬し頂礼いたします。方便と般若の無二を自性とするヘーヴァジラ尊に対しも恭敬し最勝に頂礼して、福德積集の願樂を堅持する人士が手に取る次第をよく開陳します。「そこで仏〔位〕獲得の因は福德と智慧の資糧であって、〔二〕資糧から最勝の成就が獲得される。その故に不断に資糧を積集すべし。智慧〔資糧の獲得〕は現観〔によるのであり〕、福德〔資糧の獲得手段〕は多くあるとしても、自身の本尊瑜伽による五妙樂の行が無上である」¹⁰とドーンビパ（Dombi-pa）が説いておられる。そこで、現観は五つであって、時と場所と資具と儀軌と目的である。

1 時

〔現観の〕第一〔である時〕は、上弦月の八日と十四日と十五日が吉日であると言われている。下限月も同様に三日であり、一ヶ月に六つの時が殊勝であり、〔それ以外に〕常日頃も〔為すべし〕と説かれていて、通常と殊勝〔の場合〕を知るべきである。あるいは、「マントラ行者にとっては夕方が殊勝な時刻〔であり〕、できる限り毎日または、各月、各年に〔輪を転じるべし〕。それをしなければ三昧耶が損なわれる」¹¹と言われるのである。

2 場所

〔現観の〕第二〔である場所〕は、尸林、独樹、森林、園林、河岸、災厄のない峡谷あるいは自分の住居などの諸々の場所である。

¹⁰ Toh 1231 Ña.43a4-5

¹¹ Toh 1224 Padma 'byung gnas zhabs 作 Samayaṇṇa, Ña.271-2.
sngags pas nub mo khyad par can dus nyi ma re re yi ji snyed par / zla ba re re yang ni 'khor lo las 'das
nyams par 'gyur ba yin /

3 資具

〔現観の〕第三〔である資具〕は、地面に牛五淨（*pañcagavya*）を塗る。様々な花と薫香水を撒き、供養の方規どおりに準備すべし。バリは二つ用意すると説かれている。伝統的な方規では四つのバリなどを作る。〔継ぎ目がない全体が一つの断片よりなる〕頭蓋鉢に酒を満たして前に用意する。五甘露をすべてに混ぜ合わせる。

〔供物〕台は段に作るべし。そこに肉と酒と炊いた米、麵餅（*ladḍu*）、練り粉菓子、同じく硬食（*khādanīya*）と軟食（*bhojanīya*）、飲物、同様に嘗めるもの、嗜好品などが資具の基準であり、聚会の標準的な資具をつくるべし。屍体の敷物あるいは座布団など、基準に応じて適切に置くべし。聚会の上首となる比丘については、多くのタントラを知っており、善行と瑜伽に精進して妄分別を離れ、十真実を知って大悲〔を具え〕、三昧耶に依止して小欲〔知足〕などの特相を具えたグルに対して、発菩提心して通知する。次にまた、三昧耶をもち、グルを恭敬し妄分別が小さく、怨恨を抱くことなく淨信である尊格の数など〔と相応した人数〕の人に〔参加を〕要請する。青杖（*Nīladaṇḍa*）の我慢を具えた弟子を門の傍らに配置すべし。

4 儀軌

1. 前行

〔現観の〕第四〔である儀軌〕は、正行は満足が六つであると理解すべきである。

〔正行に先立つ前行は、〕聚会の〔参加〕者たちが門の傍へ連れ立って〔来て〕、青杖〔に扮した門衛阿闍梨〕に向かって懇願すべきであって、「汝の三昧耶は美しい群青色の忿怒〔尊の三昧耶〕である。摩尼宝を結び付けた杖を手を持つ成就者よ、吉祥なる勇者の集会で輪廻から済度すると言われるお方よ、虚空の美しい瑜伽女の内に私を入れ給え」〔と唱える〕。返答の読誦は、「この場では諸法はよいものと見よ。集会者たちについて疑念はない。バラモンと犬とチャンダーラは同一の本性をもつ者であるとして食べよ」と唱えるのであり、符牒と符牒の返答である。それらが分からない者が来ても入れてはいけない。内に入った者たちに対して、*Oṃ vajra amṛtakuṇḍali hana hana hūṃ phaṭ* と唱えながら〔業〕瓶の水で灑淨すべきである。次に各自がグルに香曼荼羅を献じたところで、列へ順に着座させるのであり、次の言葉で、「灌頂を受けており慧を具え、忍辱と精進と憶念などを具え、三昧耶を行すべき行を具えた者は年醵の順番に〔着座する〕と言われている。灌頂を受けておらず無知であるが故に修法者はその輪を為すべし」¹²と云うのであり、〔着座は〕灌頂

¹² この偈頌の典拠は不明。終わりのパーダの意味は、未灌頂者で無知な修法者は福德を得るため

を受けている年膺である。次に羯磨金剛者である弟子が共同の香曼荼羅を献じる。各人にも華鬘を献じて、頂礼し跪座して、「持金剛よ、御存念し給え。私のこの殊勝なる〔資具の〕品を清浄なる心で献じますから、お好きなように納受し給え」〔と唱える〕。もしそれが分からなければ、「本尊瑜伽に対して配慮し給え」と懇願するのである。次に〔羯磨金剛者は〕他の者たちの花を集めてから香曼荼羅を作りグルに献じる。グルの花は先師に対して意によって献じるのである。その後で、〔金剛薩埵の〕百字〔真言〕読誦によって三昧耶の過不足を修治すべし。十忿怒の守護輪を堅固に観想するのも頂礼を受けて為される。その後で、現観を廣大に修習すべきである。その後で、〔マントラ〕読誦を適宜に為すべきである。

2 正行

(1) 廣大供養（外供養）

その〔前行の〕後で、自身の曼荼羅に廣大に供養すべきである。その内で外供養は、私の阿闍梨（ソナムツェモ）がお作りになったヘーヴァジラの初業者に nang nub させる儀軌¹³から知るべきであるが、ここでは開陳しないでおく。

(2) 内供養（甘露供養）

内の甘露の供養はバリの如くに加持した上で、始めにグルたちに献じるのであり、自身の根本のグルに対してが最初である。それも先に名前を唱えてから現前に顕現すると思念した上で献じるのである。次に相承者たちに対してであり、パドマヴァジラ（Padmavajra）の相承の如くであれば、「ヴァジラパーニ（Vajrapāṇi）、ヴィラスヤニヴァジラ（Vilāsyānivajra）、アナンガヴァジラ（Anāṅgavajra）、パドマ・ミユグ（Padma'i myu gu）¹⁴、インドラブーティ（Indrabhūti）、クリシュナアーチャーリヤ（Kṛṣṇācārya）と呼ばれるお方、バラモン・シュリーダラ（Śrīdhara）、ガヤダラ（Gayadhara）ご本人、阿闍金剛、瞋金剛、遊戲金剛」と相承者〔たち〕に対して先に名前を唱え、顕現する如くに縁じてから献じる。Om sarvatathāgata amṛtavajra svabhāva ātmako 'haṃ と唱えて〔献じるの〕である。ヴィルーパ（Virū-pa）の相承の場合は、ナイラートミヤー（Nairātmyā）、ヴィルーパ、クリシュナ（Kṛṣṇa）、ダ

にも聚輪の施主になるべしの意味であらうかと思われるが不詳。

¹³ SKKB vol.2 No.13 Dang po'i las can gyi bya ba'i rim pa dang lam rim bgrod tshul を指す。nang nub については不詳。

¹⁴ テキストの記述からこの人物はパドマヴァジラと考える他はない。Toh 蔵外 5199 『プトン聴聞録』 La.34b2 では mTsho skyes rdo rje（Padmavajra）と出る。

マルパ (Ḍamaru-pa)、アヴァドゥーティ [パ] (Avadhūti-pa) と呼ばれるお方、最勝なる御姿ガヤダラ、阿閼 [金剛]、瞋金剛、遊戲金剛とグルたちに恭敬して供養する。ヴィルーパの弟子であるドーンビパに随順する場合は、ドーンビパ、アララヴァジラ (Alalavajra)、Nags khrod [pa]、ガルバリパ (Garbhari-pa)、ピンダパーダ (Piṇḍapāda)、ドゥルジャヤチャンドラ (Durjayacandra)、ヴィーラヴァジラ (Vīravajra)、阿閼 [金剛]、瞋 [金剛]、遊戲金剛に対してである。そのお方たち全員の始めに自身の根本のグルの名前を先に唱えて供養するのである。または、[根本の] グルと相承の [グルの] 名前の読誦とマントラによって [である]。本尊 (ヘーヴァジラ) には根本真言と心 [真言] と随心 [真言] で、ナイラートミヤーには鬘真言と心 [真言] で、眷属たちには各自のマントラで、八尸林には [Om āḥ hūṃ の] 三文字によってである。または、自身の護法尊などに対してである。その後で、胸で甘露を味わうべきである。その後で、金剛鈴を鳴らしながら、「八女尊が供養する」[云々] の二つの偈頌¹⁵で讃嘆する。

(3) バリ供養

その後で、天尊 (*deva*) と生類 (*bhūta*) に対するバリの施与は、世間と出世間 [の存在] や自らの護方神に与えるのであり、それも離れて居るものと羯磨の儀軌を考慮して [施与するの] である。方規については、ターラー (Tārā) とカンボージー (Kambojī) の二尊にも [施与を] 為すのである。地主神にも場合によっては [施与する]。次に、聚会の資具の前にやって来て、バリの如くに加持した上で、奉食をグルに献じる。バリに対して先にマントラを読誦してから、最初に粥、肉、酒、野菜 [といった] 様々な食物と頭蓋鉢 (*kapāla*) ¹⁶を献じる。

(4) 聚会供養

次に、三昧耶をもつ勇者と瑜伽女たちを聚会の食物で満足させるには、男性の大きな継ぎ目のない頭蓋鉢によい酒を十分に満たして、蓮華回転の手でグルなどに献ずべし。「この場では諸法はよいものと見よ。集会者たちに疑念はない。バラモンと犬とチャンダーラは本性が同じとして食べよ。」「善逝の法は無比にして、食欲の垢を遠離している。所取と能取を離れた真如に頂礼いたします」。また、グルに対して二つの器を献じる。器はそれぞれ全員に対して [一つづつ] である。同様に食

¹⁵ Toh 417 Ņa.5a3, Ņa.5a7., 二儀軌 S 本 p.12(8), p.14(16)

¹⁶ テキストに出る *klad pa* は頭を意味する。そこで文脈上からも頭蓋鉢とした。

物と飲物は〔グルには〕二〔倍〕となるのであって、恭敬して食物と飲物を献じる。また口にする前に、「ああ、大智慧者たちよ、大いなる〔資具の〕品を燃やすことで煩惱を焼け。これと同じ楽が得られる」。全員が「ああ、楽よ」と唱える。次に、全員が異口同音に、「ああ、享受することは樂なり」〔と唱える〕。左手を〔器の〕下に置き、右手で〔器の〕口を覆って、A ho su [kha] prayam nam / mahāmudrāsiddhinam / tarantena hūṃ ha ha ha ha ho 〔と唱える〕。その後で、食物を享受するのであって、何も多くを言う必要はない。胸の種子が火と燃えて、そこで樟腦を飲むべし¹⁷。曼荼羅の眷属に対してそれをよく供養する。その飲物によって瑜伽者は速やかに悉地が得られる。口は炉、手は杓であり、意によって〔生起した〕火で肉などを焼くべし。内を自性とする護摩 (adhyātmahoma) で自身の願う尊格を満足させるべし。舌のフーム字の殊勝なる真実から口訣を知る者が食すべきであり、本尊瑜伽を具えない者が聚会の食物を口にするならば犬の胎に百回も生じ、卑賤種に生まれるであろう。もし、瑜伽を具えた者によって食物が口にされるならば、諸々の福德の究竟である聚輪と言われるのである。福德を願ってもそれ以外〔の方途〕では、陽炎の水をかき混ぜ、空腹から粃殻を叩き、油を求めて水を搾るのと同じである。さらに聚会の時の他の学処はプラジュニャーラクシタ (Prajñārakṣita)¹⁸とパドマ・ミュグ¹⁹とドーンビバ²⁰などがお作りになったものから知るべきであるが、教説が多すぎるのを恐れてこの場では記さないでおく。

(5) 歌舞供養

食物で満足した後で残滓を少しばかり撒いて、歌唱と舞踏で満足させるために、「kolla [iri t̪hi] 云々」²¹など知っている適切なもの（金剛歌）とヘールカの姿による舞踏を憶念を奪われていない瑜伽者が食欲心によって修習するのである。『ヘーヴァジラタントラ』の中で、「金剛法と仏と瑜伽女と母天が歌唱と舞踏を数習しつつ、最勝に歌い舞踏を為すべし。途絶えることなく歌唱と舞踏を聚会の上首の前で為してから、そこで〔諸々の〕匂いを識別すべし。〔続いて、ジャッカルの〕声を外境の園林で聴く」²²〔と説かれている〕。

¹⁷ この所作の内容は不明。タントラの「秘密の言葉」では樟腦は精液 (śukra) を意味する。

¹⁸ プラジュニャーラクシタが説く「聚会の学処」については不明。

¹⁹ パドマ・ミュグが説く「聚会の学処」とは Toh 1224 Padma 'byung gnas zhabs 作 Samayaṇa 作 Samayaṇa 指すと思われる。

²⁰ Toh 1230 Yogayoginyasādhāraṇārthopadeśa を指す。

²¹ Toh 418 Ņa.19b4.

²² Toh 418 Ņa.19b6-20a2., 二儀軌 S 本 p.64(14)

(6) 真実供養（性瑜伽）

その後で、kunduru（二根交会）の瑜伽によっても満足させるのであり、〔以上で〕六つの満足である。もし、それ（性瑜伽）がなければ勇者の饗宴（vīrabhojya）と言われる。それを具えているのが聚輪と言われるのである。

3. 随行

次に、残滓を集め三文字による加持については、「ア字」云々²³などと Om ucchiṣṭa baliṃ ta bhakṣasī svāhā と唱えて、残滓を支配する虚空と等価な〔無量の〕生類たちが満足するのであり、「菩提に住するに至るまで危難を鎮め給え」と唱えるべし。次に、儀軌の過不足を修復するために百字〔真言〕を誦誦すべし。その後で、諸々の吉慶の偈頌も心一境性で唱えるべし。次に、賓客たちに堪忍を懇願して、百字〔真言〕の終わりに muḥ（解印真言）を唱えて還着を奏上するのである。その後で、「部族に生まれて」²⁴云々など〔の誓願〕と持金剛を始めとする諸尊に頂礼するのである。「汝に対して優れた浄信から供養の品をよく献じましたので、私と無辺なる有情のすべてが輪廻の苦を遠離した後にサンヴァラ尊、持金剛、勝者となりますように」と言うのと、「一切有情が楽でありますように。一切有情に罪過なく、いかなる道でも解脱し仏位が得られますように。未だ済度されていない者も済度し給え。未だ解脱していない者も私によって解脱し、瑜伽の力を為す存在がかくの如く正しく證得〔されますように〕」云々などと、あらん限りの諸々の清浄なる誓願を施主と眷属を伴ったグルが異口同音に心一境性で唱えるべきである。次に、バリは先に世間のバリを眷属を伴った八大天尊²⁵〔といったお方〕などに撒く。出世間の〔バリ〕は〔尊格の〕根本真言を唱えながら施与すべし。もし、灌頂などの他の儀軌を為す際には、世間のバリを撒いた上で、出世間のバリを危難からの救護のために置くのである。このようにして、その場で集会者たちが、聚輪の典籍の中で述べられたものと金剛歌の中で述べられた儀軌とに違わずに、飲酒などによって酩酊しないように守護を為して、グルに頂礼して自身の場所に赴くべきである。次に、行為の後を消して守護すべきであり、欲しいままの楽に住するのである。

5 目的

²³ [静 2010: 59(fn)41]

²⁴ Toh 418 Na27a5-6., 二儀軌 S 本 p.90(6)-(7)

²⁵ インドラ（東）・ヤマ（南）・ヴァルナ（西）・クベーラ（北）・アグニ（南東）・ナイルリティ（南西）・ヴァーユ（北西）・イーシャーナ（北東）の護方神（dikpāla）を指す。

〔現観の〕第六〔である〕目的は、記述の途中でも語られたが、世間と出世間のすべての悉地と随機の諸々の目的に結びつくのである。そのような作法も相承をもつこの儀軌を見て為されるが故に、それはいささかも顛倒し迷乱となりようがないのである。

II 願文

ヴィルーパの御前などから相承し来たって、ソナム〔ツェモ〕御前を始めとするお方に合流した諸々の口訣と典籍に違うことなく、典籍の多さを恐れる者たちのために記述しました。「聚輪の中〔篇〕」として書き記されたこの中で、誤謬が何があるろうとも、ソナムの御前などに寛恕を願います。愚昧と懈怠と軽躁〔など〕の諸々について何か言うことがあっても、この〔儀軌を記述したが〕ために疲労した福德によって、衆生に大持金剛が獲得されますように。

III 奥書

他の典籍を参照した聚輪〔儀軌の典籍〕とグルの口訣に基づいて、「〔聚輪儀軌の中〔篇〕〕なるものを優婆塞タクパゲンツェンが著されたのである。これによって教法と有情に利益がもたらされますように。

4 聚輪と現観

タクパゲンツェンはサパンの根本グルであり肉親の伯父でもある。サパンは、当該儀軌のどの点を不明瞭と見なしたかは明らかにしていない。先に出したサパン作『聚輪儀軌』の科文と当該儀軌を比較すると、サパンの儀軌が構成を「時・場所・仲間・資具・儀軌・目的」の六支分としているのに対し、おそらくケアレスミスであろうが、当該儀軌は「仲間（人士）」を欠いている。また当該儀軌の「4 儀軌」では「前行」の語を出すことなく唐突に「正行」への言及から始めている。反面、当該儀軌は、インドからサキヤ派にまで至ったグルたちの名前を三系統の相承譜で明らかにしている。これはサパン作『聚輪儀軌』には見られない。こうしたいくつかの相違は見られるものの、サパン作『聚輪儀軌』が当該儀軌の構成を大枠で踏襲していることは科文の比較から明らかである。当該儀軌は5 フォリオ半程の小編であることから、題名どおり作法儀軌（マニュアル）としては簡略にされた感は否めない。

次に、インドで金剛乗の信解者たちが頻繁に行っていた聚輪がチベットの地で

はどのような形に変化したかを知りたい筆者の問題意識の前段として、作法書である聚輪儀軌がチベットの地ではどのように展開したかの考察に移りたい。ここでのキーワードは現観 (*abhisamaya*, *mngon par rtogs pa*) である。最初に筆者の基本的な理解を述べる。

インド仏教は声聞乗・波羅蜜乗・金剛乗の全体を通して三学 (戒・定・慧) を契機としてもつ。金剛乗に特化すれば、波羅蜜乗とは不共な見 (*dr̥ṣṭi*) が「慧」に、修習 (生起・究竟の二次第に基づく観想 *bhāvanā*) が「定」に、遵守すべき行儀・生活規範・修行の実際の営為のすべてを含む三昧耶である行 (*caryā*) が「戒」に相当する。この三カテゴリーの内、見は修習と行に具現され、また両者の基底にあつてその成立の意味を保証している。修習は宗教実践者の精神作用に焦点を当てることで切り取られる領域である。行は宗教実践者の具体的な行儀・規範・所作に焦点を当てることで論じられる領域である。そして、実践者に体现された見の体系と修習と行の三つの体系が緋い交ぜられて仏教徒の宗教実践の総体が現前する。とくに、修習と行については、所謂「心身問題」として知られる人間存在のあり方によって、実際の宗教実践で両者は同時的で不可分であることから複雑な問題が生じる。ある一つの事象は修習でもあり、それは行でもあると分類できるからである。

筆者が論じている聚輪は、金剛乗の全史を貫いて見られる集団的な修法であり、個々の具体的な所作・行為を広範に伴う「戯論の行」 (*prapañcācaryā*) ²⁶ の典型をなす。ここから、総体としての聚輪儀礼は戯論の行として論じられるが、その構成ユニットには修習の体系の諸部分が不可分に組み込まれている。

次に、修習について言えば、金剛乗の阿闍梨たちは波羅蜜乗が出した現観を生起・究竟の二次第を統一的に実修する観法に改変する。このような展開の中で、集団的な修法として実際に行われるべき聚輪が修習の体系に取り込まれる展開も想定される。そもそも、金剛乗自体が、観念・理念が現実を覆い尽くし、さらには現実をも創出する極端な哲学的一元論を内容とする見に立っている。修法者は「絶対的実在」に成り得るとし実際に「成る」。さらにそれ以前に、絶対的実在をまさに文字通りの意味で前提としていることが金剛乗がもつ第一義の見である²⁷。さなければ生起・究竟の二次第は増上慢の戯言・大法螺に過ぎなくなる。さらに、金剛乗は観想・曼荼羅建立・マントラ読誦等によって大乘 (波羅蜜乗) が唱道した宗教

²⁶ [静 2006: 87~126]

²⁷ 所謂「顕教」の見、とくに「原理主義的」に理解された中観の見は金剛乗の第一義の見とは絶対に両立し得ない。空性の見は金剛乗の内にあつて、第二義の見としての役割を受け持ったのではないかと推測されるが、その具体相の追求は今後の課題としたい。

実践（六波羅蜜行）を代替する。この精神性の趣くところ、聚輪であっても観念上の操作で円満したとされることは何ら不思議ではない。

そこで問題となるのが、タクパゲンツェンの当該儀軌に見られる次の文言である。彼は冒頭の「総論の開示」に当たる項目の最後で、「そこで、現観は五つであって、時と場所と資具と儀軌と目的である」と明言している²⁸。現実の設営と所作をもつ集団的修法である聚輪において、場所と時は枠組みであり、資具は具体的な事物、儀軌は所作の時系列で進行すべき行為の集積である。さらに聚輪を構成する参加者は生身の男女瑜伽者であることを前提としている。このことは、インドで撰述された多くの聚輪儀軌が参加者の資格について明確な制限を課し、集会の場での厳しい行儀作法を要求することからも明らかである。聚輪は本来的には現観ではあり得ない事象である。それでは、当該儀軌がここで「現観」と明記している意味は何であろうか。タクパゲンツェンは、ヘーヴァジラタントラが聚輪を説示する〈飲食品〉の註釈中で以下のように述べている²⁹。

〔この章品が説く〕第二の内容である聚輪については、概義（spyi don）は六つであって、場所・時・仲間・資具・儀軌・目的である。儀軌についても前行と正行と随行の三つにつきそれぞれ六〔ユニット〕で〔合計するとユニットは〕十八となすものと、名称の意味については仲間と現観する本尊瑜伽と目的〔など〕で区分すれば八つとするものも厳密に積すべきであるが、今はタントラの現観（前者）として見るべきである。典籍の意味自体については、「何処においても食えることによって」云々の二パーダで目的が説示されて、「聚輪を為すならば世間と出世間の一切の悉地が成就する」と説示される。（略）

引用から、タクパゲンツェンが概義（spyi don）と現観（mngon par rtogs pa）を同義として用いていることは明らかである。聚輪儀軌の舞台を構成する六つの枠組みが現観の文言で捉えられていることから、修習の特定の様相である現観（*abhisamaya*）の意味とは別に、ここでは解釈学で概念図を構成する際のカテゴリの意味を担わされていると理解される³⁰。ところで、上記引用の意味内容は『現

²⁸ サパン作『聚輪儀軌』は相当箇所「現観」の文言を使わず *ji ltar bya ba'i cho ga* とする。

²⁹ SKKB vol.3 No.9 *brtag pa gnyis pa'i rnam par bshad pa ma dag pa rnam 'joms par byed pa'i rnam 'grel dag ldan*, Cha.313b1-4.

³⁰ さらに『現観宝樹』が力点を置く第四章「タントラの現観」は、金剛乗の見・修習としての現観・律儀と三昧耶の三つすべてを包摂する体系図を提示していることから、章題の「現観」に金剛乗の宗教実践の全体系を意味させているとしか考えられない。

観宝樹』中の「飲食の三昧耶」³¹の科文に詳細に出ることからも明らかとなる。

『現観宝樹』「飲食の三昧耶」科文

飲食の三昧耶	111a4
1 通常の飲食の三昧耶	111a5
1. 甘露の丸薬成就の説示	111a5
2. 所依の説示	111b3
3. 利益の説示	111b3
2 殊勝な飲食の三昧耶（聚輪）	111b4
1. 名称の意味 ³²	111b5
(1) 人士による区別	
（「聚輪」・「男性勇者の饗宴」・「女性勇者の饗宴」）	111b5
(2) 瑜伽による区別	
（尊格の数と相応しない場合は「親しい者の集会」）	111b6
(3) 時による区別	
（護摩・善住式の時は「乳粥の飲食」）	111b6
(4) 目的による区別	
（尊格の数と同人数で調伏の場合は「仏の舞踏」）	112a1
(5) 供養の対象による区別	
（「Rig ldan ma 供養」「クマーリーの齋」）	112a3
2. 儀則	112a2
1 場所	112a3
1. 初業者の場合	112a3
2. 心堅固（煖位）を得た者の場合	112a4
2 時	112a5
1. 通常の時	112a5
2. 殊勝な時（タントラ聴聞・講釈・善住式 etc）	112b1
3 資具（肉と酒は不可欠）	112b3
4 人士（gang zag）	112b5
1. 初業者	112b5

³¹ 『現観宝樹』 Cha.111a4-114a6.

³² SKKB vol.3 No.2 rGyud sde spyi'i rnam gzhag dang rgyud kyi mngon par rtogs pa'i stong thun sa bcad (sTong thun sa bcad と略) Cha.159b1 では、(2)と(3)の順番が入れ替わっている。

2. 心堅固を得た者	113a2
3. 心の大堅固を得た者	113a2
5 儀軌（三区分）	113b1
1. 前行（六区分）	113b2
(1) 住居の荘厳	113b2
(2) 内外供物（飲食物・バリ）の準備	113b2
(3) 金剛阿闍梨の入住	113b2
(4) 青杖（門衛阿闍梨）への懇願と会衆の入住	113b3
(5) 本尊瑜伽の要請	113b3
(6) 百字真言の読誦	113b3
2. 正行	
（「我生起」or「我生起」「現前生起」両方での曼荼羅供養）	113b3
(1) 広大供養（外供養）による三摩地曼荼羅の満足	113b5
(2) 甘露供養（内供養）による胸の曼荼羅の満足	113b6
(3) バリ供養による護法・守護神の満足	113b6
(4) 飲食（内護摩）での三昧耶をもつ者（瑜伽者）の満足	113b6
(5) 歌舞供養によるダーキニーの満足	114a1
(6) 〔真実供養（性瑜伽）〕 ³³	（記述なし）
3. 随行（六所作）	114a1
(1) 金剛歌の詠唱と吉慶讃の読誦	114a1
(2) 残滓のバリ施与	114a2
(3) 三昧耶の修復（百字真言の読誦）	114a2
(4) 所願成就のための誓願奏上	114a2
(5) 堪忍の懇願と還着の奏上	114a2
(6) 守護と会処の後始末	114a3
6 目的	114a3
1. 根本目的（vidyārāja の成就）	114a4
2. 随機目的（長寿・無病 etc）	114a4

タクパゲンツェンの当該儀軌および『現観宝樹』が作成された年は筆者には不

³³ 『現観宝樹』Cha.114a1 には、tshim pa drug po dngos so とのみ記述されている。sTong thun sa bcad , Cha.159b6 には、「俱生智による身体曼荼羅の満足」 lus kyi dkyil 'khor lhan cig skyes pa'i ye shes kyis tshim pa'o と記されている。

詳であり、当該儀軌とサパン作『聚輪儀軌』の先後関係が分かるだけである。既に述べたように、当該儀軌が、明白なミスは別としてもその題名どおり詳細な記述でなく不備なものであることは、弟子のサパン作『聚輪儀軌』と比較すれば一目瞭然である。ところが一方で、このサパンの著作は『現觀宝樹』の詳細な上記チャートの掌の内にあると言える構成となっていることから、筆者には「ウロボロスの蛇」のイメージが湧く。因みにプトウンの聚輪儀軌『大樂遊戲』も大枠ではタクパゲンツェンの上記チャートを踏襲している³⁴。つまり、集团的修法（行）である聚輪が「飲食の三昧耶」として現觀（修習）の体系に組み込まれ、インドで行われていた聚会の全体像が手際よく整理される。その現觀の体系に基づいて聚輪儀軌が改めて行の作法儀軌として記述されるという構図である。プトウンの『大樂遊戲』は、精緻にして広大なサキャ派の現觀体系の一部である「殊勝な飲食の三昧耶」のフォーマットに合わせてインド撰述の諸聚輪儀軌を割り振った内容であるとの表現も可能である。

現觀の問題はひとまず置いて、当初の具体的な設問に戻る。つまりサパンが考えた当該儀軌の「不明瞭な箇所」とは何を指すのであろうか。彼此参照の結果、それは二点あると思われる。

その一つは性瑜伽の問題である。タクパゲンツェンは、当該儀軌の「正行（6）真實供養」において、「その後で、kunduru（二根交会）の瑜伽によっても満足させるのであり、〔以上で〕六つの満足である」と述べるのみで当事者への言及はない。因みに『現觀宝樹』ではこの項目についての内容説明を欠く。それに対してサパンは、「風（*prāṇa*）の威力を具えながら女使者（*dūti*, 瑜伽女）の道を修習する瑜伽者であれば、女使者の道自体を修習することもある。風の威力をもたず女使者の道を修習しない者たちは、胸にバターや酥油あるいは酒を少しばかり撒いた上で、よく喜悅し、自身はヘールカの父母尊であり、頭頂にはグル〔が現前し〕、顕現するすべてのものは如来の曼荼羅であると憶念せよ」³⁵と述べて、女性パートナーとの性瑜伽実修を「風の瑜伽」（究竟次第）が修習できる威力ある瑜伽者には許容する一方で、そうでない者には観想上での対応に限定している。

二つ目は金剛乗の「飲食の三昧耶」と僧伽の食事作法の問題である。サパンは聚会の食事作法について、出家者の僧伽の場合と瑜伽者たちの場合に区別する。ここでは、前者の場合だけを引用する。

³⁴ [静: 2005] [静: 2009]

³⁵ SKKB Vol.5 Na.133a6-b1., [静 2010: 38]

聚会の資具については、二つある作法の中で、出家者の僧伽での作法は、供物とバリの献供として肉と酒などを献ずべし。出家者たちは舌で〔それに触れて〕味わうだけにしておく。さらにまた、砂糖と果実の浄化などはバリを加持する如くに為すべし。五肉 (*pañcamāṃsa*) を五甘露〔である〕と思念して食するが故に、〔金剛乗十四〕根本墮罪の第十三³⁶の過失は生じない。〔五肉は〕仏・菩薩や智慧ダーキニーたちによって加持されるのであって、『秘密集会』の中で、「肉などが全く無い時でも思念によって作り出すべし。金剛瑜伽によって食するが故に一切諸仏が加持なさる」³⁷とされている。また『サンプタ』の中でも、「肉が何物なければ、分別が肉の自性であるとなして、世間の者が食べるものは何であれ食すべし」³⁸と説かれている如くである。従って、インドの阿闍梨竜樹父子と無着兄弟から伝承した大尊者アティシャや私の親教師である大乞食者 (*Śākyaśrībhadra*) などの聚輪の作法は以上である。諸々の僧伽が灌頂などの際に、このようにすれば良いのである³⁹。

以上の二つの便法はタクパゲンツェンの当該儀軌には見られず、サパンが明瞭に述べた項目である。とくに、僧伽の食事作法については、彼はそれをインドの正法であると誇っていることから、具足戒受法の際の親教師シャーキャシュリーバドラからの影響は明らかである。当該儀軌が聚輪を転じる当事者についての記述を漠然と一般的な瑜伽者としているのに対して、サパン作『聚輪儀軌』は、「出家者の僧伽」と「瑜伽者」を区分し、本来的な聚輪の当事者は瑜伽者であるとの前提の上で、僧伽に属する比丘の総体をも金剛乗の「戒」に当たる三昧耶の遵守へ導く方便を示したものと理解できよう。

5 現観の相承譜について

タクパゲンツェンの当該儀軌は「内供養」の際に、相承のグルの系譜として「パドマヴァジラの相承」「ヴィルーパの相承」「ドーンビパ（ドーンビヘールカ）の相承」の三種類を出している。この三種はすべてガヤダラ (*Gayadhara*) に来たり、

³⁶ 金剛乗十四根本墮罪の第十三は、Toh 2478 rDo rje theg pa rtsa ba'i ltung ba bsdus pa では以下の通りである。

dam tshig ji bzhin rnyed pa dag // mi bsten pa de bcu gsum pa // (Zi.179b2-3)

³⁷ Toh 442 Ca.110b3.

³⁸ Toh 381 Ga.107b3-5 取意。

³⁹ SKKB vol.5 Na.130b6-131a5., [静 2010: 34~35]

阿闍金剛 (Mi bskyod rdo rje)、瞋金剛 (Zhe sdang rdo rje)、遊戯金剛 (Rol pa'i rdo rje) からサキヤ派祖師に至っていると理解される。「聖者伝説」に見られる伝承の霧に閉ざされた幾多のインドの阿闍梨たちとは違って、ガヤダラはチベットに三度も巡錫し、チベット人訳経師との翻訳業に実際に携わった歴史上の人物である。とくに彼はドクミ訳経師 ('Brog-mi, 992~1074, 1072?) と深い関係をもったことが『青冊史』から知られる⁴⁰。このガヤダラからの伝承を繋ぐ阿闍金剛・瞋金剛・遊戯金剛は灌頂名もしくは通称であり、彼らがチベット人宗教家でなければこの系譜は歴史的にも文脈的にも筋が通らない。しかしこの三人が具体的な個人名を欠いているのが筆者には不思議である⁴¹。タクパゲンツェンは、Bla ma rgya gar ba'i lo rgyus の中で、ヴィルーパーの伝記を述べた後、彼からの「四種口伝」(snyan brgyud bzhi) ⁴²の相承譜を出している。それを要約して出すと以下ようになる。

Virū-pa-----Nag po pa (Kṛṣṇa-pa) -----Ḍamaru-pa-----Avadhūti-pa-----Gayadhara
-----des rje btsun Mi bskyod rdo rje la / des Zhe sdang rdo rje la / des Rol pa'i rdo
rje la / des Mi bskyod rdo rje Sa skya pa chen po (Sa chen) ⁴³

これは当該儀軌に挙げられる「ヴィルーパーの相承」と同一である。ガヤダラ以下の相承を示す箇所は、「ガヤダラが尊者阿闍金剛へ、そのお方が瞋金剛へ、そのお方が遊戯金剛へ、そのお方が阿闍金剛であるサチェン〔クンガニンポ〕へ（略）」とあるとおり、三つの名称をもつ人物はヴィルーパーを遠祖とする教説⁴⁴を受け、次に繋いだ実在の人物として記述されている。サチェン（祖父）に続くのは当然、ソナムツェモ（兄）、タクパゲンツェン（本人）となる。次に、『現観宝樹』の通序と文末から、現観の相承を述べる箇所を引用する。

その大阿闍梨(ヴィルーパー)の正しい教誡を聖典と共に阿闍梨 Kahna-pa (Kāñha, Kṛṣṇa) と呼ばれるお方から相承し来たったものをもつパンディタはガヤダラである。吉祥なるヴィルーパーの弟子としても知られるが、変化身の智慧ダーキニーから実際に聴聞し最勝の成就が得られた阿闍梨である吉祥なるドーン

⁴⁰ ŚPS vol.212 Na.2b4-7., BA p.207.

⁴¹ サキヤ派が保持する「道果説」に関してもガヤダラからサチェンに至るその伝授の関係はかなり複雑である。『青冊史』 Na.5b5-6a4., BA p.215.

⁴² 「四種口伝」が筆者には不詳である。

⁴³ SKKB vol.3 Cha.347b6.

⁴⁴ Toh 2284 Lam 'bras bu dang bcas pa'i rtsa ba rdo rje'i tshig rkyang (金剛句偈) を指す。

ビヘールカの教誡と顛倒なき聖典の相承をもつ比丘はヴィーラヴァジラと言われる。このように、お二人の智者の教説の甘露が降った尊者ドクミ・シャーキャイエーシェーから相承したヘーヴァジラの根本〔タントラ〕と釈タントラ（『金剛網』⁴⁵『サンプタ』⁴⁶）の三つを一つに緋い交ぜて先師たちによって作られた現観の文言で、不明瞭なものを明白にするために、私のグル（ソナムツェモ）がタントラの諸典籍を教説どおりに一方向に緋い交ぜて少しばかり明瞭に為されたのである⁴⁷。さらにそれをも明瞭にするために阿闍梨の御前も〔私に〕「書きなさい」と仰せになり、タントラの意味が知りたい弟子（タクパゲンツェン本人）もまた懇願したのでこの書き記したものについては過誤は存在しないのである⁴⁸。

かくの如く、それら（因・果・方便の三タントラの現観）もまた冒頭に述べたお二人のグルからどのように相承し来たったかをこの場で述べる。持金剛と吉祥なる智慧ダーキニー、尊者で護法者にして威力自在者ヴィルーパ、クリシュナ、ダマ〔ル〕パ、アヴァドゥーティ〔パ〕、尊者ガヤダラ、最勝なるシャーキャイエーシェー（ドクミ）と第一の相承を述べたので、さらに第二〔の相承〕も述べるべきであって、第二は吉祥なるドーンビヘールカに随順して、アララ〔ヴァジラ〕、吉祥なる Nags khrod〔pa〕、ガルバリパ、ジャヤシュリージュニヤーナ（Jayaśrījñāna）、ドウルジャヤチャンドラ、ヴィーラヴァジラが智者ドクミに教誡したのである⁴⁹。

このように、タクパゲンツェンは自宗にとってドクミがガヤダラからインドの現観の伝承を受け継いだ正系であることに太鼓判を押している。しかし文末のこの引用に続く文言は、「かくの如く二人の尊者からのその相承をマナサロワール的大海であるグル・シャーキャイエーシェー（ドクミ）が摂受してから、そのお方もマナサロワール的大海から四〔本の〕河が流れ下る如くに最勝なる四人の弟子に教誡して（略）」云々と抽象的な麗句であり、タクパゲンツェンはドクミからサキャ派への相承を繋ぐ個人名を誰も挙げていない。

⁴⁵ Toh 419 *Dākinīvajrapaṇjara-tantra*

⁴⁶ Toh 381 *Samputa-tantra*

⁴⁷ ソナムツェモの著作 *rGyud sde spyi'i rnam par gzhag pa* (SKKB vol.2 No.1 Ga.1-74a6)を指すものと思われる。同書の科文および内容については〔田中: 116~125〕

⁴⁸ SKKB vol.3 Cha.2b4-3a4.

⁴⁹ SKKB vol.3 Cha.137a4-6.

最後に、阿闍金剛、瞋金剛、遊戲金剛の呼び名を挙げている例として、『プトゥン聴聞録』からヘーヴァジラ関連のサキヤ派五祖への相承が見られる三系統を以下に出す。

rDo rje 'chang---- bDag med ma (Nairātmyā) -----Virū-pa-----Nag po pa
(Kṛṣṇa-pa) -----Ḍamaru-pa-----Avadhūti-pa-----Ghayadhara [= Gayadhara]
-----Mi bskyod rdo rje-----Zhe sdang rdo rje -----Rol pa'i rdo rje -----Mi
bskyod rdo rje (Sa skya pa chen po) -----sLob dpon rTse mo (bSod nams rtse
mo) -----rJe btsun pa (Grags pa rgyal mtshan) -----Chos rje pa (Sa skya paṇḍita)
(略) ⁵⁰

rDo rje 'chang----Vilāsyavajra-----Yan lag med pa'i rdo rje (Anaṅgavajra)
-----mtsho skyes rdo rje (Padmavajra) -----Indrabhūti-----lcam Lakṣmī-----Nag
po skyod pa (Kṛṣṇācārya) -----bram ze dPal 'dzin (Śrīdhara) -----Ghayadhara
[= Gayadhara] -----'Brog mi shākya ye shes-----Se ston kun rig-----Zhan dgon
pa ba chos 'bar-----Sa chen (略) ⁵¹

rDo rje 'chang----bDag med ma (Nairātmyā) ----- Virū-pa----- Nag po pa
(Kṛṣṇa-pa) ----- Ḍamaru-pa-----Avadhūti-pa-----Ghayadhara [= Gayadhara]
----- Brog mi shākya ye shes-----Se 'khor chung ba kun rig-----Zhang dgon pa
ba chos 'bar-----Kun dga' snying po (Sa chen) -----bSod nams rtse mo-----Grags
pa rgyal mtshan-----Sa skya paṇḍita-----Bla ma chos rgyal ('Phags pa) (略) ⁵²

以上の引用から、ガヤダラから相承を受けた阿闍金剛とは、ドクミ・シャーキヤイエーシェーであるとする以外はないと思われる。『プトゥン聴聞録』に出る Se ston kun rig (Se 'khor chung ba kun rig) と Zhan dgon pa ba chos 'bar の二人についてはさらに調査していきたい。

結語

本稿では、サキヤ派第三祖タクパゲンツェン作の聚輪儀軌の和訳を中心にして、

⁵⁰ ŚPS pt.26 La.54b3-4.

⁵¹ ŚPS pt.26 La.34b2-3.

⁵² ŚPS pt.26 La.34b3-5., [Davidson: 131]

現観（修習）と聚輪（行）のカテゴリーとしての相違と結合の仕方という大きな問題を提出した。ヘーヴァジラタントラの〈密印品〉〈飲食品〉が聚輪を説く章品であることから、それに依拠して多くのインドの阿闍梨が聚輪儀軌を作成している。多くの儀礼ユニットを内包する複合儀礼である灌頂儀軌の場合も事情は同様である。他方でタントラの解釈学も時を同じくして展開したのであり、その方向からは、現観の体系が精緻に構成される。サキャ派の場合、タクパゲンツェンが述べるように、ドクミからもたらされたヘーヴァジラタントラに基づく現観がサチェン、ソナムツェモと下って更なる展開を見たのであろう。タクパゲンツェンの『現観宝樹』では、実際に集団的に行う集会の設営・所作を「飲食の三昧耶」の一部として「解釈学」のレベルに移し替えた上で、「観念の体系」つまり現観のチャートへの組み込みが行われている。

さて、実際に行われる儀礼の場では、観想が不可欠な構成部分である。研究の方法論では、聚輪や灌頂といった集団的な儀礼と観想である現観の両者を腑分けしてその相互関連を精査し、さらに両者を貫徹し基礎づけている金剛乗の見の独自性を炙り出すという方向で、三者の個別的な有り様を探り、最後に「戒・定・慧」の三者が緋い交ぜられた全体としての金剛乗の宗教実践総体を決断することが肝要であろう。そこでは「妙観察智」が要請される。筆者は聚輪と現観の関係のあり方を切り口にしてサキャ派の相承を遡ってインドへまで追求していきたい。

チベット語テキスト

I 敬礼文と概義の開示

(109a4) tshogs 'khor 'bring po bzhugs //

Oṃ swa sti siddham / yon tan rin chen skyed byed spros bral ba'i / bla ma'i zhabs kyi pad
la gus pas 'dud / thabs dang shes rab gnyis med bdag nyid can / kye'i rdo rje la'ang gus par
rab btud de / bsod nams bsag 'dod rten gyi gang zag gis / lag tu blang ba'i rim pa rab tu
dbye /

de la sangs rgyas thob pa'i rgyu // bsod nams ye shes tshogs yin te //

tshogs las dngos grub mchog thob 'gyur // de phyir rtag tu tshogs bsag bya //

yes shes mngon par rtags pa ste // bsod nams rnam pa mang yod kyang //

(109b) rang gi lha yi rnal 'byor gyis // 'dod yon lnga spyod bla na med //

zes Ḍoṃ bi pas gsungs so // de la mngon par rtogs pa ni lnga ste / dus dang / gnas dang / yo
byad dang / cho ga dang / dgos pa'o //

1 時

dang po ni /
yar ngo'i brgyad dang bcu bzhi dang // bcu lnga la ni rab tu bsngags //
mar ngo'am de bzhin dus gsum ste // zla gcig dag la dus drug ni //
khyad par rtag tu'ang gsungs pa ste // spyi dang khyad par shes par bya // gzhan yang /
sngags pas nub mo khyad par dus // nyi ma re re'am ji snyed par //
zla ba re re'am lo re la // de ma byas na dam tshig nyams //
zhes so //

2 場所

gnas ni /
dur khrod shing gcig skyed mos tshal // kun dga' ra ba chu bo'i ngogs //
ri sul 'tshe ba med pa'am // rang gi khyim sogs gnas rnams so //

3 資具

yo byad ni /
sa gzhi ba yi rnam lngas byug // me tog dri zhim sna tshogs dgram //
mchod pa tshul bzhin bsham par bya // gtor ma gnyis su bsham par gsungs //
phyag bzhes gtor ma bzhi sogs mdzad // thod pa cha ni gcig pa ru //
chang gis bkang la mdun du bsham // bdud rtsi lnga yis kun la sbags //
rten ni dgram pa nyid du bya // de la sha dang chang dag dang //
'bras chan la du 'khur ba dang // de bzhin bza' ba bca' ba dang //
btung ba de bzhin ldag pa dang // myang ba la sogs 'byor pa'i tshad //
tshogs kyi 'byor pa sta gon bya // ro yi stan nam 'zam pa sogs //
tshad dang mthun par ci rigs gzhag // tshogs kyi bdag po dge slong la //
rgyud rnams mang po shes gyur cing // dge sbyor brtson la rtog pa spang //
de nyid bcu shes snying rje che // dam tshig bsten la 'dod chung sogs //
(110a) mtshan nyid ldan pa'i bla ma la // sems bskyed pa la snyan gsan dbab //
de nas gzhan yang dam tshig can // bla ma la gus rtog pa chung //
'khon gcugs med cing rab dad pa // lha grangs la sogs mi gsol gdab //
dbyug sngon nga rgyal 'dzin pa yi // slob ma sgo drung dag tu bzhag //

4 儀軌

1. 前行

cho ga ni / dngos gzhi tshim pa drug tu go bar bya'o // tshogs kyi ming[=mi] mams sgo
drung du lhags pa dang / dbyig pa sngon po la gsol ba gdab par bya ste / khyed kyi dam
tshig la ni khro bo sngon po mdzes / dngos grub phyag na dbyig[=dbyug] to dang ni rin
chen bcings pa 'dzin / dpal ldan dpa' bo 'du ba 'khor sgrol khums mkhas[=mkha'] mdzes /
rnal 'byor ma yi nang du bdag thong shig / lan brjod pa /
'dir ni chos rnams bzang por ltos // 'dus pa rnams la the tshom med //
bram ze khyi dang gdol pa dang // rang bzhin gcig pa nyid du zo //
zhes brjod de / brda dang / brda'i lan no // de rnams ma shes par gyur pa ni 'ong du mi
gzhug go // nang du byung ba rnams la Om badzra a mṛ ta kuṇḍa li ha na ha na hūṃ phaṭ
ces brjod cing bum chus gtor bar bya'o // de nas so sos bla ma la maṇḍala phul la gral rim
gyis 'dug par byas te de skad du /
dbang bskur thob cing blo ldan bzod // brtson dang dran pa la sogs ldan //
dam tshig spyad bya spyod par ldang // rgan pa'i rim pa bzhin du 'dod //
dbang ma thob par mi rigs pas // sgrub pos 'khor lo de bya'o //
zhes byas te dbang bskur thob pa'i rgan rim mo // de nas las kyi rdo rjer slob mas spyir
maṇḍala phul / so sor me tog gi phreng ba phul la /
phyag byas te pus mo btsugs la // rdo rje 'dzin sogs dgongs su gsol //
bdag (110b) gi tshogs kyi khyad par 'di // dang ba'i sems kyis 'bul lags na //
ci bde bar ni bzhes su gsol //
gal te de mi shes par gyur na lha'i rnal 'byor la thugs gtad par zhu / zhes gsol ba gdab bo //
de nas gzhan rnams kyi me tog bsdus la maṇḍala byas pa bla ma la dbul / bla ma'i me tog
bla ma gong ma la yid kyis dbul lo // de'i rjes la yi ge brgya pa brjod pas dam tshig gi lhag
chad sbyang / khro bo bcu'i srung ba'i 'khor lo brtan par bsgom pa yang phyag bzhes la
mdzad / de'i rjes la mngon par rtogs pa rgyas par bsgom par bya'o // de'i rjes la bzlas pa ci
rigs par bya'o //

2 正行

(1) 廣大供養 (外供養)

de'i rjes la bdag nyid kyi dkyil 'khor la rgyas par mchod par bya ste / de la phyi'i mchod pa

ni bdag gi slob dpon gyis kye'i rdo rje'i las dang po pas nang nub tu bya ba'i cho ga mdzad
pa las shes par bya'i 'dir ma spros so //

(2) 内供養 (甘露供養)

nang bdud rtsi'i mchod pa ni gtor ma bzhin byin gyis brlabs la thog mar bla ma rnams la
dbul te / rang gi rtsa ba'i bla ma la thog mar ro // de yang mtshan brjod pa sngon du 'gro
bas mngon sum lta bus gsol bar bsams la dbul lo // de nas brgyud pa rnams la ste / Padma
badzra'i brgyud pa lta bu la / Phyag na rdo rje Bi lā sya ni badzra dang / Yan lag med pa'i
rdo rje Padma'i myu gu dang / Indra bhū ti Nag po spyod pa zhes bya dang / bram ze
dpal 'dzin Ga ya dha ra nyid / Mi bskyod rdo rje Zhe sdang rdo rje dang / Rol pa'i rdo rje /
zhes bya bas brgyud pa la mtshan nas brjod pa sngon du 'gro bas mngon sum gsol ba lta bur
dmigs nas dbul / Oṃ sarba ta thā ga ta a mṛ ta badzra swa bhā wa ātma ko 'ham / zhes brjod
pas so // Birwa pa'i brgyud pa la / bDag med ma dang Birwa pa / Nag po Ḍa ma ru pa [pa] /
A ba dhū tī zhes bya dang / mtshan (111a) mchog Ga ya dha ra dang / Mi bskyod Zhe sdang
rdo rje Rol pa'i rdo rje dang / bla ma rnams la gus pas mchod / Birwa pa'i slob ma Ḍom bi
pa'i rjes 'brang la / Ḍom bi pa dang A la la badzra / Nags khrod Garbha ri pa bSod snyoms
pa / Thub dka' zla ba dPa' bo rdo rje dang / Mi bskyod Zhe sdang Rol pa'i rdo rje la'o // de
rnams kun gyi thog mar rang gi rtsa ba'i bla ma'i mtshan brjod pa sngon du 'gro bas mchod
do // gzhan yang bla ma dang brgyud pa'i mtshan brjod pa dang sngags kyis / gtso bo la rtsa
sngags snying po nye snying gis / bdag med ma la phreng sngags dang snying pos / 'khor
rnams la rang sngags kyis / dur khrod brgyad la 'bru gsum gyis so // gzhan yang rang gi
chos skyong la sogs pa la'o // de'i rjes la snying gar bdud rtsi myang bar bya'o // de'i rjes la
rdo rje dril bu gsil zhing / lha mo brgyad kyis mchod / bstod pa gnyis kyis bstod /

(3) バリ供養

de'i rjes la lha dang 'byung po la gtor ma sbyin pa ni / 'jig rten dang 'jigs rten las 'das
pa'ang rang gi phyogs skyong la sbyin pa ste / de yang gzhan logs na yod pa dang las kyi
cho ga mthong bas so // phyag bzhes la sgrol ma dang mi g'yo ba gnyis la'ang mdzad do //
gzhi bdag la'ang skabs su'o // de nas tshogs kyi yo byad mdun du 'ongs la gtor ma bzhin
byin gyis brlabs la phud bla ma la dbul / gtor ma la sngags brjod pa sngon du 'gro bas thog
mar tri pi ta / ba la / ma da na / ma la indha na / bza' ba dang / klad pa sna tshogs dbul lo //

(4) 聚会供養

de nas dam tshig dang ldan pa'i dpa' bo dang rnal 'byor ma rnams tshogs kyi kha zas kyis
tshim par bya ba ni /

skyes pa'i thod chen cha gcig par // chang ni bzang pos yongs bkang la //

padma bskor ba'i lag pa yis // (111b) bla ma sogs la dbul bar bya //

'dir ni chos rnams bzang por ltos // 'du ba rnams la the tshom med //

bram ze khyi dang gdol pa dang // rang bzhin gcig pa nyid du zo //

bde gshegs chos ni ring thang med // 'dod chags dri ma rnams par spangs //

gzung dang 'dzin pa dang bral ba // de bzhin nyid la gus phyag ' tshal // de yang /

bla ma la ni snod gnyis dbul // snod ni re re kun la'o //

de bzhin bza' btung nyis 'gyur te // gus pa yis ni bza' btung dbul //

de yang bza' ba'i sngon du // e ma'o ye shes chen po rnams //

tshogs chen 'bar bas nyon mongs sreg // 'di 'dra'i bde ba thob 'gyur ba //

kun gyis a ho su kha brjod // de nas kun gyis mgrin gcig tu //

A ho su kha bha gā[=kṣa]nām / lag pa g'yon pa 'og tu bzhag la g'yas pas kha bcad la / A ho
su pra yaṃ nām / ma hā mu drā pa [=si] dhinaṃ / ta rante na hūṃ ha ha ha ho / de'i rjes
su kha zas longs spyad de /

mang pos ci bya dgos med pa // snying ga'i sa bon me 'bar la //

der ni ga pur btung bar bya // dkyil 'khor pa la de rab mchod //

gtung ba de yis rnal 'byor pa // myur du dngos grub thob par 'gyur //

kha ni hoṃ khung lag pa gzar bu ste /

nyid kyis me la stobs sogs bsreg // nang gi bdag nyid sbyin sreg gis //

rang 'dod lha ni tshim par bya // lce hūṃ de nyid khyad par las //

man ngag shes pas bza' bya ste // lha yi rnal 'byor med gyur pas //

tshogs kyi kha zas zos na ni // khyi yi skye ba brgyar skyes nas //

sme sha can du skye bar 'gyur // gal te rnal 'byor ldan pa yis //

kha zas bza' bar byas gyur na // bsod nams rnams kyi mthar thug pa //

tshogs kyi 'khor lo zhes bya'o // bsod nams 'dod (112a) pas de las gzhan //

smig rgyur chu ni rnyog pa dang // bkres phyir phub ma brdung ba dang //

mar 'dod chu ni bsrubs dang mtshungs //

gzhan yang tshogs kyi dus kyi bslab bya gzhan Pradznyā ra kṣi ta dang / Padma'i myu gu
dang / Ḍom bi pa la sogs pas mdzad pa las shes par bya'i gzhung mangs pas 'jigs pas 'dir

ma bris so //

(5) 歌舞供養

kha zas kyis tshim pa'i rjes la lhag ma cung zad bor la glu gar gyis tshim pa'i don du /
kolla la sogs ci shes dang // he ru ka yi gzugs kyis gar //
dran pa mi 'phrogs rnal 'byor pas // 'dod chags sems kyis bsgom pa'o //
rdo rje chos dang sangs rgyas dang // rnal 'byor ma dang ma mo yis //
glu dang gar la goms bya zhing // mchog tu glu dang gar bya'o //
rgyun du glu dang gar byed pa // tshogs kyis gtso bo'i mdun byas nas //
de la dri ni mtshan par bya // sgra ni phyi rol tshal du mnyan //

(6) 真實供養 (性瑜伽)

de'i rjes la kun du ru'i sbyor bas kyang tshim par byas te / tshim pa drug go // gal te de med
na ni dpa' bo'i ston mo zhes bya'o // de dang ldan pa ni tshogs 'khor zhes bya'o //

3. 隨行

de nas lhag ma bsdus te / 'bru gsum gyis byin gyis brlabs la a kā ro zhes bya ba la sogs pa
dang / Om̐ u tstshiṣṭa ba liṃ ta bha kṣa sī swā hā / zhes brjod la lhag ma la dbang
ba'i 'byung po nam mkha' dang mnyam pa rnam tshim par gyur la / byang chub la mchis
kyi bar du bar chad zhi bar mdzod cig ces brjod par bya'o // de nas cho ga lhag pa dang ma
tshang ba kha bskang ba'i phyir yi ge brgya pa gdon par bya'o // de'i rjes su bkra shis kyi
tshig rnam kyang yid rtse gcig pas gdon par bya'o // de nas mgron rnam la bzod par gsol
ba byas la / yi ge brgya pa'i (112b) mthar muḥ brjod la gshegs su gsol lo // de'i rjes su rigs
su skye dang zhes bya ba la sogs pa dang / rdo rje 'dzin sogs phyag 'tshal lo //
khyod la rab tu dang ba yis // mchod pa'i tshogs ni rab phul bas //
bdag dang mtha' yas sems can kun // 'khor ba'i sdug bsngal spangs nas ni //
bde mchog rdo rje 'dzin rgyal shog // ces pa dang /
sems can tham cad bde gyur cig // sems can thams cad skyon med par //
gang gi lam gyis grol 'gyur ba // des ni sangs rgyas nyid thob 'gyur //
ma bsgral ba yang bsgral bar bgyi // ma grol ba yang bdag gis dgrol //
rnal 'byor stobs bya ba yi dngos // de lta bu ni yang dag brtags //
zhes bya ba la sogs pa dang / smon lam rnam par dag pa ci yod pa rnam yon bdag dang bla

ma 'khor dang bcas pas mgrin gcig tu yid rtse gcig pas gdon par bya'o // de nas gtor ma ni /
 ngon la 'jig rten pa'i gtor ma lha chen brgyad po 'khor bcas dang bya ba la sogs pa
 btang / 'das pa'i rtsa sngags bzlas shing bskyal bar bya / gal te dbang bskur la sogs pa'i cho
 ga gzhan byed na / 'jig rten pa'i gtor ma btang la / 'das pa'i gtor ma bar chad bsrung ba'i
 phyir gzhas go // de ltar na der tshogs pa rnams kyis tshogs kyi 'khor lo'i gzhang
 nas 'byung ba dang / rdo rje'i glu nas 'byung ba'i cho ga dang mi 'gal ba chang gi btung ba
 la sogs pas myos par mi 'gyur bar bsrung ba byas la / bla ma la phyag 'tshal la rang gi gnas
 su 'gro bar bya'o // de nas las kyi rjes med par byas la bsrung bar bya ste ci bder gnas so //

5 目的

dgos pa ni / gseb tu yang brjod mod kyi / 'jig rten dang de las 'das pa'i dngos grub thams
 cad dang gnas skabs kyi (113a) dgos pa rnams la sbyar ro // de lta bu'i lag len yang brgyud
 pa dang ldan pa 'di'i cho ga mthong bas bya yis de min ci nas kyang don log cing 'khrugs
 par gyur ro //

II 願文

Birwa'i zhal snga sogs las brgyud 'ong zhing // bSod nams zhal snga la sogs dngos phrad
 pa'i //

man ngag gzhang rnams dang ni mi 'gal ba // gzhang mangs 'jigs pa rnams kyi don du
 bris //

tshogs kyi 'khor lo 'bring du bris gyur pa // 'di las 'gal bar gyur pa ci yod pa //

bSod nams zhal snga sogs la bzod par gsol // rmons pa rmu rgod rnams la smras ci yod //

'di las ngal bar gyur pa'i bsod nams kyi // 'gro bas rdo rje 'chang chen thob par shog //

III 奥書

gzhang gzhan la ltos pa dang bcas pa'i tshogs kyi 'khor lo'i gzhang dang bla ma'i man
 ngag la brten nas 'bring du bya ba dge bsnyen Grags pa rgyal mtshan gyis sbyar ba'o // 'dis
 bstan pa dang sems can la phan thogs par gyur cig ///

略号

サキヤ派全集: Sa skya pa' bka' 'bum, the Complete Works of the Great Masters The Sa
 sKya Sect of the Tibetan Buddhism, Bibliotheca Tibetica comp. by bSod

nams rgya mtsho, Toyo Bunko, 1968 (東洋文庫本)

『青冊史』: 'Gos gZhon nu dpal, Deb ther sngon po, The Blue Annals, ŚPS. vol.212.

二儀軌 S 本: Snellgrove, D.L., *The Hevajra Tantra A Critical Study*, London Oriental Series 6, 1959.

『プトゥン聴聞録』: Bu ston Rin chen grub, Bla ma dam pa rnams kyis rjes su bzung ba'i tshul bka' drin rjes su dran par byed pa, The Collected Works of Bu ston, ŚPS pt.26.

BA: 『青冊史』

ŚPS: Śata-piṭaka Series

SKKB: サキャ派全集

参考文献

石濱裕美子「チベット密教史」『チベット密教』春秋社, 1999.

静 春樹「プトゥンのガナチャクラ儀軌『大楽遊戯』和訳(2)」『高野山大学密教文化研究所紀要』22, 2009.

「サキャパンディタの『ガナチャクラ儀軌』和訳」『高野山大学密教文化研究所紀要』23, 2010.

立川武蔵『西藏仏教宗義研究第一巻: トゥカン『一切宗義』サキャ派の章』東洋文庫, 1974.

田中公明『チベット密教』春秋社, 1993.

津田真一「タントラとは何か」『豊山学報』24, 1979.

Davidson, R. M., Preliminary Studies on Hevajra's Abhisamaya and the Lam 'bras Tshogs bshad, *Tibetan Buddhism Reason and Revelation*, State University of New York Press, 1992.

キーワード

タクパゲンツェン サキャパンディタ (サパン) ガナチャクラ (聚輪) 現観

高野山大学密教文化研究所研究員

Research Fellow of the Research Institute of Esoteric Culture of Koyasan University